人と人 心ふれあう未来へ 東区

第六回 十湖賞 俳句大会

入選句集

俳句は「自然」の中に満ちている

四季の「山・野・川・海」

平成26年2月発行

〈発行元〉浜松市東区俳句の里づくり事業実行委員会
〈 主 催 〉浜松市東区俳句の里づくり事業実行委員会、浜松市
〈 協 力 〉浜松文芸館
〈 後 援 〉静岡県教育委員会、浜松市教育委員会、静岡県俳句協会、
中日新聞東海本社、静岡新聞社・静岡放送、NHK静岡放送局、テレビ静岡、
静岡朝日テレビ、だいいちテレビ、K-mix、Fm Haro!、ケーブルウィンディ
〈事務局〉浜松市東区役所区振興課内
〒435-8686 浜松市東区流通元町20-3
TEL 053-424-0115 FAX 053-424-0131
E-mail e-shinko@city.hamamatsu.shizuoka.jp

「十湖賞」と「浜松市東区俳句の里づくり事業」

松島十湖翁は江戸の末期、現在の浜松市東区豊西町に生まれた俳人にして政治家、さらには地域貢献に努めた篤志家です。生涯に創られた句は7千とも言われ、全国各地に多くの門人がおりました。

十湖の俳句は、松尾芭蕉翁から蕉風を継承すべく、花鳥風月といわれる、春夏秋冬・四季折々の自然、あるいはその中での生活を詠む伝統的なものです。

「はま松は出世城なり初松魚」は、「出世の街　浜松」を象徴する、浜松を誇る気持ちを詠んだ句です。

東区では、こうした十湖の遺徳を称えるとともに「郷土を愛する心」を今に伝えるべく「十湖賞」俳句大会を開催いたしております。

元来、東区内には多くの句碑群があり、同時に多くの俳人をも輩出し、俳句の里としての側面を垣間見ることができます。

東区及び実行委員会では、この様な背景のもと、「浜松市東区俳句の里づくり事業」を行っております。

第六回「十湖賞」俳句大会入選句集

平成26年2月9日(日)
於　なゆた・浜北3階なゆたホール

目次

ごあいさつ……2・3
十湖大賞……4
十湖賞……5
東区長賞
県教育長賞……6
市教育長賞
特選……7
佳作……8・9
奨励賞……10～13

第六回「十湖賞」俳句大会投句実績

一般の部		高校生の部		中学生の部		小学生の部		全　体	
人数	投句数	人数	投句数	人数	投句数	人数	投句数	人数	投句数
461	1,649	972	2,652	1,831	4,030	1,875	5,210	5,139	13,541

一般の部・地域別	
地域	投句数
市内	1,179
県内(浜松市外)	172
県外	298
合計	1,649

※募集期間:平成25年7月15日(月)～10月11日(金)

ごあいさつ

浜松市東区俳句の里づくり事業実行委員会
委員長　松島 知次

第六回「十湖賞」俳句大会は応募総数５１３９人、１万３５４１句と、今大会もたくさんの投句をいただくことができ、中にはこの大会に複数回投句されている方も増えてまいりました。投句された皆様に深く感謝申し上げます。

今大会では、大会史上初めて中学生が十湖大賞に輝きました。前回大会の小学生の十湖大賞受賞と合わせて、小中学生の俳句を詠む力が年々向上していることがうかがえます。浜松市東区俳句の里づくり事業では区内の学校を中心に「小中高校俳句講座」を行っております。今年度は、これまで最多の87クラス、82時間の講座を行い、たくさんの子どもたちに俳句に親しむ機会を提供することができました。これは講師を引き受けてくださる地域の俳句愛好家の方々のご尽力と講座を受け入れてくださる学校の先生方のご協力の賜物であり感謝の念に堪えません。

この大会は６回目を数えますが、人でいえばようやく小学生になるところであり、これからも末長く愛される大会となりますよう、回を重ねてまいります。

結びに、入選された皆様に感謝とお祝いを申し上げます。

浜松市東区長　玉木 利幸

浜松市東区では「人と人　心ふれあう未来へ　東区」のキャッチフレーズのもと、「歴史と文化が香るまち」の実現に向けて、地域資源の再発見とその活用による様々な施策を行っています。平成25年度は昨年に引き続いて、歴史学者の磯田道史氏の講演会をはじめとする「東区・家康公ゆかりの里」推進事業や地元ゆかりの音楽家・村松崇継氏を招いた「東区市民映画音楽祭」など、様々な事業を実施してまいりました。

ここ東区は明治・大正期に地元の俳人「松島十湖翁」により俳句が広められ、多くの句碑が残されているなど、「俳句の里」でもあります。平成19年度に「浜松市東区俳句の里づくり事業」を立ち上げ、今回で6回目となる「十湖賞」俳句大会のほかにも、小中高校俳句講座、俳句の講演会やワークショップ、句碑めぐりツアーなどの事業を行い、俳句文化の醸成を図っています。

今回の大会も、市内をはじめ全国からたくさんの投句をいただき、主催者として大変うれしく思っております。

結びに、たくさんの俳句を選考いただきました選者の方々に、心から敬意を表しますとともに、ご投句いただいた皆様をはじめ、この大会に携わっていただいたすべての方に心から感謝申し上げ、挨拶といたします。

十湖大賞

◆中学生の部

山眠るそれでも空は青いまま

笠井中学校　二年　熊谷　和也

評

「山眠る」は冬の季語。冬の山の静まりかえった様を言います。冬枯れの山は音もなく寂しいのですが、空は晴れていて明るい。冬は寂しい季節だという人々の思い込みを軽やかに覆し、朗らかに冬景色を捉えて新鮮でした。（高柳克弘）

十湖賞

◆一般の部

一息に山の高さへ鷹柱

浜松市中区　山田　初代

評

鷹の渡りで有名な伊良湖岬での鷹柱の一瞬を把握。「一息に山の高さへ」とは、岬をめざしてきた鷹が岬の小山の上空で上昇気流を捉え「鷹柱」となってやがて伊勢の方角へ飛翔。その光景は悠然として荘厳である。（笹瀬節子）

◆高校生の部

あめんぼの波紋のあとをついてゆく

二俣高校　二年　坪井香菜子

評

「あめんぼ」が水面をすいすいと泳いで出来た「波紋」。その波紋の跡を、別のあめんぼが付いてゆく景か。この句、あめんぼ一点に集中することにより、その生態をいきいきと描いた。伸びやかな詩心と写生の眼が光る。（九鬼あきゑ）

◆小学生の部

赤蜻蛉草けり海けり夕日けり

北浜南小学校　六年　永井　大貴

評

「夕焼け小焼けの赤とんぼ」の詩情（詩的感情）が平成俳句となって生まれた。新時代にふさわしく、力強い躍動感に満ちた句。「けり」の三つの動詞の繰り返しも魅力的。自然の中に自己を見る作者がいる。（鈴木裕之）

赤蜻蛉（あかとんぼ）　波紋（はもん）　鷹柱（たかばしら）

東区長賞

◆一般の部　子規の忌の湖上にしぶき浴びてをり　浜松市北区　松原美千代

県教育長賞

◆高校生の部　蟬が鳴く父とむすこで山の中　藤枝順心高校 一年　﨑山　綾

市教育長賞

◆中学生の部　えんぴつを落して見あげた夕焼けを　与進中学校 一年　中島　崇登

◆小学生の部　初日の出海の鏡にうつしたり　積志小学校 六年　足立　楓賀

特選

◆一般の部

海へ出て光となりぬ秋の蝶　浜松市南区　戸塚　きゑ

陽に向かひ跳ぶもののあり大花野　浜松市東区　鈴木　明寿

◆高校生の部

真っ直ぐに空を掴んだ曼珠沙華　春野高校 一年　渡辺　祥真

霜柱歩いて気づく存在感　二俣高校 二年　緩鹿　光

◆中学生の部

山頂に夕やけこやけが待っていた　天竜中学校 一年　清水かつお

秋の山色であふれる水彩画　与進中学校 三年　山泉航太朗

◆小学生の部

きこえたよ水の中からセミしぐれ　静大附属浜松小学校 六年　髙橋　諒

からっ風海の上にもからっ風　芳川小学校 六年　平田　美月

佳作

◆一般の部

天竜は森の水甕夏木立　磐田市　兵藤　惠

海鳴りの届きしところ曼殊沙華　浜松市浜北区　松本　重延

穴惑ひあたりの草の生臭し　熊本県八代市　貝田ひでを

落ち合ひて枯野に消ゆる修道女　福岡県宗像市　梶原マサ子

盆のもの浮べて川はひた流る　浜松市南区　杉本たつ子

花野より戻りし父の靴を拭く　香川県高松市　涼野　海音

◆高校生の部

鮎上る大天竜の青い水　二俣高校　一年　中村　駿介

金色の稲穂の波に溺れそう　春野高校　三年　堀内　大地

水切りは西日がうつす未来像　二俣高校　三年　鈴木　豪人

氷とけ川が流れて日が流れ　二俣高校　二年　鷲見　天晟

風すぎて森が眠れば山眠る　二俣高校　一年　生熊　悠里

サイレンが山にひびいて夏終わる　二俣高校　一年　中山　良樹

◆中学生の部

丸い月もう一つある川の中　天竜中学校　一年　北沢　美帆

夏の海いつもと違うワンピース　笠井中学校　三年　松島　澄恵

春の野にあふれてるのは命の輪　天竜中学校　二年　佐藤　唯

爽やかな風が木の葉をのんでいく　笠井中学校　一年　西尾　悠花

野原にも風鈴の音が聞こえたよ　与進中学校　一年　袴田　凌矢

春風がどきどきたくさんつれてくる　笠井中学校　三年　小木　百花

◆小学生の部

あめんぼが数えきれないあんま川　大瀬小学校　二年　本樫　愛花

海の底磯巾着がゆれている　豊西小学校　六年　藤田　唯斗

寝ころぶと緑と青とぼくの色　積志小学校　六年　市川　恵介

冬の星山と街ではちがう星　佐藤小学校　六年　吉田　茉由

波たちが夏の別れを告げている　中郡小学校　五年　佐藤　耕平

雲がもくもくあきのふじ山とおかった　中郡小学校　二年　小栗　彩

奨励賞

◆一般の部

薄野に傾ぎて赤き道しるべ　浜松市東区　石橋　朝子

鮎落ちて里に静寂の戻りけり　浜松市浜北区　金子ミキ子

曳馬野に万葉のうた萩刈れり　浜松市中区　伊賀　和子

鴨並ぶ川辺に近し百句塚　浜松市東区　田村　滋治

秋の山くるりと回し投網打つ　浜松市浜北区　松本　つね

川床の風のはこびし京訛　浜松市北区　島　友造

峰雲や水冷え切つて梓川　浜松市中区　染葉三枝子

紅葉照る校舎の裏のへび山も　浜松市中区　安立由美子

海風を存分に入れ夏座敷　浜松市中区　内藤さと子

鰡跳んでまたとんで湖華やげる　浜松市西区　山本ふさ子

青き海空より青し帰燕かな　浜松市南区　鈴木　秀子

逆潮の天竜河口鳥渡る　浜松市東区　越川　都

落葉踏む音を山路へ返しけり　浜松市浜北区　川島多美子

名月や裏山少し低くなる　東京都武蔵野市　本田いづみ

風吹けば土のほてりや秋の暮　浜松市東区　髙林　慶吉

竜淵に潜む天竜濁りたる　浜松市東区　成田　慶子

寒鰤の海に真白き護衛艦　浜松市中区　髙橋　紘一

まれびとも称へ初日の富士の山　千葉県佐倉市　小池　成功

梓川(あずさがわ)　峰雲(みねぐも)　京訛(きょうなまり)　投網(とあみ)　曳馬野(ひくまの)　薄野(すすきの)
護衛艦(ごえいかん)　寒鰤(かんぶり)　逆潮(さかしお)　帰燕(きえん)　湖(うみ)　鰡(ぼら)

◆高校生の部

初凪や今歩みゆく人生に　浜北西高校 一年　桑原　実生

いわし雲青き海へと沈みたり　浜松修学舎高校 一年　椎木亜由美

夏の川流れゆく水ゆるやかに　藤枝順心高校 一年　紅林　美月

帰り道ふと気がつけば虫の声　浜松東高校 一年　松本亜宥奈

人と人会い桜の木咲きてちる　春野高校 二年　福原　健太

夕焼けを一人川辺に立ちつくす　二俣高校 三年　波多野乃子

春風にあたり一面命の芽　浜松東高校 一年　小森わか菜

新緑に風が通れば木々の声　二俣高校 一年　佐口　瑠衣

いちょうの木見上げてみれば流れ星　二俣高校 一年　小池由季乃

キリギリス川辺で水をふるわせる　二俣高校 三年　西田　佑輝

落葉踏み聞こえた山の枯れた音　二俣高校 一年　髙村弥奈美

夜の月海に浮ぶは椎の花　藤枝順心高校 一年　堀井亜珠花

海こえて山川こえて鳥帰る　二俣高校 三年　前嶋　愛美

海開きみんなで波をおいかける　浜松東高校 一年　太田　帆南

椎(しい)　初凪(はつなぎ)

奨励賞

◆中学生の部

野原には清き鳥達夜光虫　丸塚中学校 一年　渋谷　颯太

上流の荒い川さえ凍る冬　天竜中学校 一年　小澤　翔

菜の花に雨の音だけいつまでも　丸塚中学校 三年　松原　弘騎

校庭の部活のかけ声夏がきた　笠井中学校 二年　門奈　太朗

蚊帳の中人間二人蚊一匹　天竜中学校 二年　伊藤　あみ

啄木鳥は森に住んでる大工さん　与進中学校 二年　中野　裕恭

川氷るするとみんなは乗ってみる　天竜中学校 一年　高柳　翔子

祖母と待つ仕掛け花火や土手の上　丸塚中学校 三年　古橋　花菜

毛糸編む祖母の背中はあたたかい　天竜中学校 二年　磯部　莉子

海の波自然の中のオルゴール　笠井中学校 一年　清水　紀寿

いわし雲過去も未来も持って行く　笠井中学校 一年　河島　奈央

川の中光がさすよ星月夜　丸塚中学校 一年　野中　嶺寧

天竜に鮎輝いて祖父思う　笠井中学校 三年　村木　佑吏

夕凪の海に吸われしわが心　与進中学校 二年　鈴木　祥希

くらやみに光の川や夏登山　天竜中学校 一年　櫻井　颯人

夕凪(ゆうなぎ)　啄木鳥(きつつき)　蚊帳(かや)　夜光虫(やこうちゅう)

◆小学生の部

名月をのせて流れる馬込川　積志小学校 六年　須田　泰地

春の野に新たな生命鳴いている　積志小学校 六年　秦　さくら

野の上にトンボ一匹ホバリング　積志小学校 六年　小杉　匠央

夏野原ねっ転がるとくすぐったい　積志小学校 五年　高柳　杏水

やまめつり父が七ひき私ゼロ　与進北小学校 六年　赤澤　由夢

海の中貝をかついだカニがいた　豊西小学校 六年　中川　花穂

つぼめの子ぼくといっしょの家にいる　与進小学校 六年　河原　朋哉

夏の海魚のうろこかがやいて　和田東小学校 六年　金原　未佳

たんぽぽがふわりとうかび旅に立つ　積志小学校 五年　酒井　りほ

肩並べにこにこ笑うフキノトウ　笠井小学校 六年　石神由利代

ブランコでおにいちゃんよりせがたかい　与進小学校 六年　川路　秀虎

粉雪が川の底へと泳いでる　北浜南小学校 五年　高柳　結羽

夏木立ちらちら光かくれんぼ　北浜南小学校 五年　沢口　莉菜

秋の山赤と黄色の着物きる　積志小学校 六年　青島　莉奈

つちのなかだいこんもぐっておふとんだ　豊西小学校 三年　鈴木　麻由

清い川心の中を夏にする　積志小学校 六年　一木　天馬

秋の日に鳥とふれあう山の中　豊西小学校 六年　十河あかり

邪魔はない夏の野山ださあ走れ　佐藤小学校 六年　内山　一哲

案山子さんあっちこっちにゆらゆら　大瀬小学校 四年　岡田　姫佳

相撲とりぼくの相手が強そうだ　有玉小学校 六年　木下　空要

案山子(かかし)